

演題番号：A2

## 野生猪豚熱対応の取組

○山本郁巳<sup>1)</sup>，寺谷知恵<sup>1)</sup>，仁里小夏<sup>1)</sup>，榊原美帆<sup>2)</sup>，亀山 衛<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 兵庫県淡路家保 <sup>2)</sup> 姫路農林 <sup>3)</sup> 兵庫県姫路家保

1. はじめに：2021年7月末、淡路島で初めて豚熱陽性の死亡野生猪を確認した。その後、短期間に急増し、島内全域に拡大した。急増する猪の豚熱検査対応(以下、猪対応)にあたり、家畜保健衛生所(以下、家保)施設内での交差汚染の危険が高まったため、防止対策を講じた。また、現在の猪対応は、家保職員による現地採材で汚染拡大の危険を伴うことから、採材が簡便で、汚染の危険が低い耳片による豚熱ウイルス(以下、CSFV)検出方法を検討した。

2. 材料および方法：(1) 猪対応と豚関連業務の実施に伴い、人員、動線、機材の3点で区管理した。猪対応専門の人員及び機材を設定し、豚関連の作業動線と隔離した。(2) CSFVと同属の牛ウイルス性下痢(以下、BVDV)の持続感染牛が耳片で検出できることに着目し、家保職員以外の一般人でも採材可能な、耳片でのCSFV検出の可能性を検討した。2021年11月～2022年6月の猪対応で、臓器以外に耳片を採取した12例を検体として、臓器(扁桃、脾臓、腎臓)及び耳片乳剤のPCR、さらにBVDV抗原ELISA(以下、ELISA)を行い、判定結果を比較した。

3. 結果：2021年7月から短期間で島内の野生猪に、豚熱が蔓延したが、「人員」「動線」「機材」を厳密に管理することで、交差汚染を防止、急増する猪対応にも対策出来た。臓器乳剤PCRは12検体中9検体が陽性、耳片PCR及びELISAでは臓器乳剤PCR陽性の9検体の内、8検体が陽性と判定した。臓器乳剤PCRと比較して、一致率は92%であり、耳片PCR及びELISAの感度は0.89、特異度は1.0であった。

4. 考察および結語：豚熱の交差汚染対策を講じつつ、新たなCSFV検出方法の検討を行ったが、双方ともに一定の結果を得ることができた。今後は、更に検体数を増やし、検査の再現性や検体の条件について検討していきたい。